

## 「結婚」とは



ゲストハウス（アフィーテ目黒）©株式会社目黒雅叙園



ハワイ挙式イメージ©ワタベウェディング株式会社

結婚は、人生において、本当に大きいイベントの一つであるの言うまでもない。しかし、私自身、結婚式を挙げてから早二〇年となり、最近結婚式に出る機会も少ない。どんな結婚式、披露宴等が今の主流なのか、カップルはどのように考えてそのスタイルを選んでいくのかなどをお聞きすべく、ブライダル業界最大手であるワタベウェディング株式会社を訪ねた。商品企画部渡辺まり部長、広報グループ中山結花主任がご対応くださり、現在に至るまでの変化も含めて、丁寧にお話いただいた。

ご本人はもちろん、親としても参考になるので、ご紹介したい。

### 時代的な変遷

〃ハデ婚〃は、一九八〇年～一九九〇年の高度成長期に、「人生の節目にお金をかける」ようになったことに始まる。セレモニーは画一的で、ホテル式場内の神前挙式が大多数。披露宴は宴会場での着席スタイル。

一九九二年 結婚情報誌「ゼクシィ」（リクルート社、月刊）の創刊もあり、バブルの崩壊も相俟って、特に一九九〇年代後半には「ジミ婚」、すなわち、「お金をかけない」方向性が出てきた。その一方で、チャペル&ドレス姿での挙式が急増、ホテル・式場も庭園や屋

上にチャペルを建てるところが増えた。キリスト教徒でもないのに、教会で結婚式を挙げることに少し違和感を覚えた人もいたことだろう。かくいう私もその類いだ。

そして、二一世紀にはいり、ベルトコンベア式の進行ではなく、「自分たちらしい結婚式」を挙げたいカップルが急増した。中山主任いわく、そのポイントは、「ゲストに対して、アット・ホームなウェディング」であり、ゲストに対するホスピタリティーの目線で希望を伝えていくことが多いそうだ。ホテル、式場に加え、レストラン、ゲストハウス（左上写真参照）、船などで挙式を行うという選択肢が広がったのもここ一〇年ほどである。

### 現代挙式事情

「演出に力を入れ、招待客を退屈させない。また両親への感謝の気持ちを伝え、皆に喜んでもらう、という当然のことをより重視する傾向が強くなっています。」と中山主任は言う。迎賓館のような「ゲストハウス」での挙式・披露宴がここ数年大幅に伸びているのもそれらを裏付けている（表1）。

海外挙式も増加傾向にあり、挙式を挙げるカップルの約七％が海外挙式を選択している（結婚情報誌「ゼクシィ」（リクルート発行）調べ）。そのうち、

## 『ALPS読者限定キャンペーン』

詳しくは Web で

※8月末日まで

## サマーマリアージュ

檢、索

通常のキャンペーン価格に加え、『ALPS』読者限定でフラワーシャワー(約6名様分)をプレゼントいたします。『ALPS』冊子持参(このページのコピーでも可)の上、お申し込みください。ハワイ・グアム挙式が10万円から叶うチャンスです。

＜お問合せ先＞

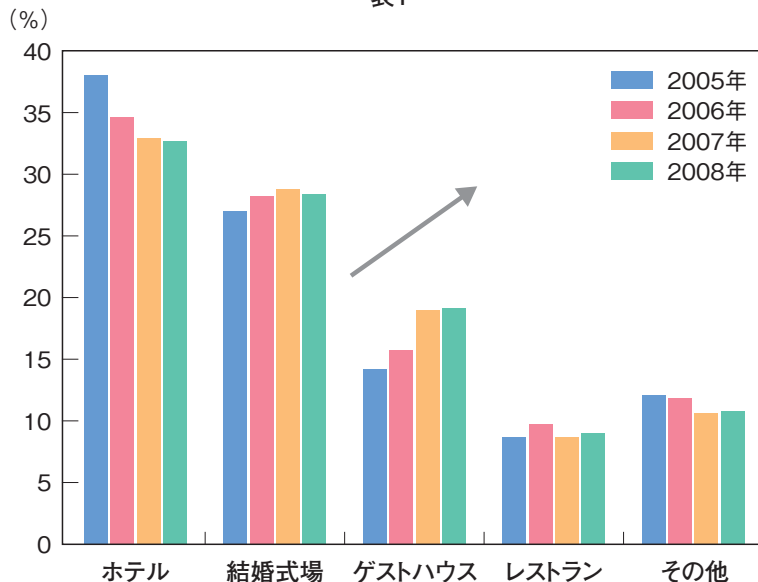
ワタベウェディング 0120-41-2141

<http://www.watabe-wedding.co.jp>



海外挙式©ワタベウェディング株式会社

表1



出典：結婚情報誌「ゼクシィ」（リクルート発行）調べ

半数がハワイを選んでゐる。親孝行としての家族も含めた海外旅行、本人の新婚旅行を兼ねることができ、かつ、職場関係の人をはじめ、大勢の人を呼ばずに済むというメリットもある。

このように新しい動きが見られる中で、「和装回帰」の動きもある。伝統的な和のスタイルをベースに洋髪でアレンジを施すなど個性派花嫁も増えてきている。(写真下)

また、今回の取材を通して一番驚いたのが、「仲人」。披露宴に仲人を立てた比率が、最近では、わずかに一％程度。比較的その比率が高い九州においてさえ、二〇〇八年データで二・一％である（結婚情報誌「ゼクシィ」（リクルート発行）調べ）。

地方公務員が主要読者である本誌



「京都和婚」 © ワタベウェディング株式会社

ならではの質問。「全国的に見て、特徴のある披露宴を行うところがありませんか」と尋ねたところ、渡辺まり部長によれば、「沖縄がわかりやすい例だと思えます。沖縄へ挙式のために行く人たちがたくさんいる一方で、地元の人たちは過去からの習慣に従ったやり方で行っています。招待状で出欠確認の返信はがきを入れるという習慣はなく、案内状を送ります。式は、二〇〇～三〇〇人規模であることが多く、皆で踊りを行うなど全員参加のイベントそのものです。時間も長くかけます。また、一般の来賓より両親、親戚が新郎新婦に近いところ、すなわち上座に座ることが多いようです」とのことだ。

(取材：協会職員 多田正巳、竹内敦)

図2 晩婚化、晩産化(平均初婚年齢と母親の出産年齢の変化)

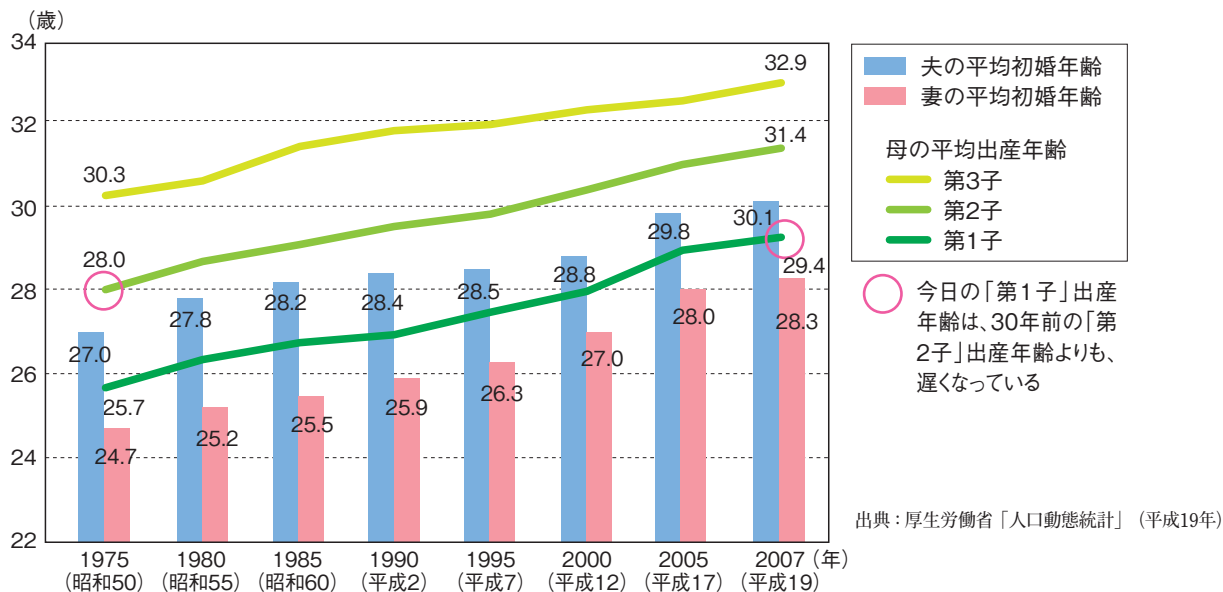
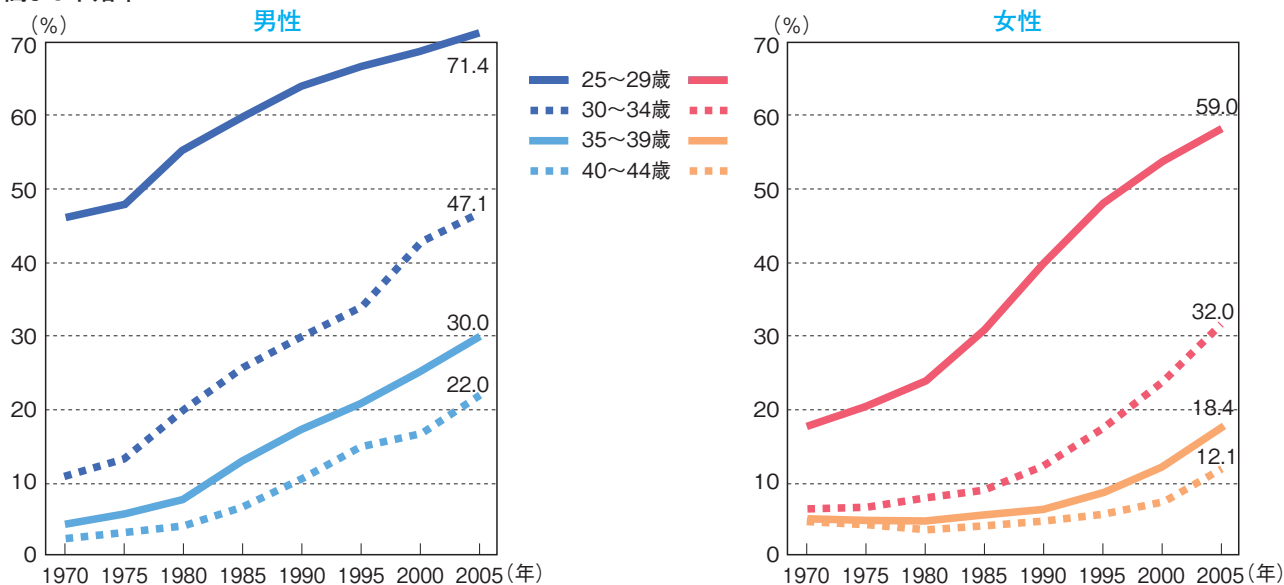


図3 高まる未婚率



出典：内閣府「国民生活白書」(平成15年)、総務省統計局「国勢調査」(平成17年)により作成。

1. 男女、年齢層(5歳階級)別にみた配偶関係割合(未婚)の推移。
2. 割合の分母になる年齢別人口には配偶関係不詳の人を含む。

結婚式、披露宴の現代事情を見ていたただいた後で、結婚を社会的情勢でとらえた場合、どのような状況になってきているかをご紹介したい。

晩婚化、晩産化、未婚率という側面で見ても、図2、図3だ。

そして、法的な結婚、すなわち婚姻届を提出したカップルが、約七三万組(二〇〇八年)。そのうち、約三割が挙式を挙げない、なし婚層だ。また、約七三万組のうち、きちやった婚(今は、おめでた婚)というようである)は、これも約三割となっている。そして、約七三万組のうちの約二五%が、再婚層である。

アラフォーという言葉が聞かれたことがあるだろうか。アラフォーとは「around40」の略で、四〇歳前後の人々を指す表現として用いられるようになってきた。この世代の女性は、一九八五年の男女雇用機会均等法において、社会進出を果たしたと言われている。「仕事と結婚」の二択が迫られていた施行前に比べ、女性が仕事をしながら自立して生活しやすい状況となり現在に至る。しかし、このことが人生の転機を遅くさせ、晩婚化という現象に拍車をかけている事実も見逃せない。この状況を描いたTBS系列金曜ドラマ「Around40」注文の多い女たち(主演：天海祐希)(二〇〇八年四月～六月に放映)が話題を集めたのも記憶に新しいところである。

アラフォー独身女性による座談会が最後のテーマだ。



ホンネが  
聞ける

# アラフォー女性+1 座談会

Y：聞き手。1959年生まれ。男性。協会職員

Y：はじめに結婚経験のあるお二人に聞きます。結婚した理由は？

C：私は高校時代からのまさに腐れ縁の彼氏と二七歳で結婚しました。

A：私は短大時代からの付き合いで、「そろそろ私も結婚しなきゃいけないのかな」という感じで結婚したと思う。

Y：適齢期みたいな考えが強かったということ？

A：周りも入社三年目ぐらいから、結婚で会社を辞め出すんです。仕事も同じ流れになってきて、やり尽した感があったし、家を出たかったというのもあった。そして、二六になる年に結婚式を挙げました。

Y：例えば、経済的なこととか、将来に對してどうか、そのあたりはどう考えた？ どっちかというノリで結婚した、もしくは何となく横がよく見えなくて、突っ走ったみたいなき感じになってしまったの？

C：ノリも大切。タイミングとかはやはり大切。

A：周りで結婚するのが、本当にすごく集中したんです。私もそのころから友達の結婚式に呼ばれ始めて、「こんなに付き合いが長いのに、何で私たちこんなにダラダラと付き合い合っているんだろう」と思ってた。

C：「結婚しよう」って、どっちが言い出したの？

A：「しよう」ではなくて、私の方から「どうするの？」みたいな感じで。私もO

L生活は楽しかったけれど、結婚したら、もっと楽しいことが待っているんじゃないかと思った。主婦になったら、OL生活とはまた違う生活があるんじゃないかと。

Y：それは、現実としてあり得るね。学生のころから長い間付き合い合っていたら、もう燃え上がって勢いで結婚しているわけじゃないよね。

A：勢いだけでは結婚してないですね。でも、私が変わったというより、向こうのほうが変わったと思う。

Y：向こうが、自分の持っていたイメージと違った。

A：違いました。

Y：どう違ったの？

A：彼は、結婚の少し前に、銀行系のエンジニアから父親が経営する会社転職しているんです。結婚してから、全然二人の生活がないような感じ。

C：結婚生活も、思い描いていたものただいぶ違ったみたい？

A：最初の半年ぐらいいは楽しいと思った。その後、何かすごい孤独感というから、接待がすごく多かった。個人の事務所だから、勝つためには、接待とかいろいろなことをやりながら仕事をしなければいけないが、私は理解できなかった。ゴルフとか何だかんだと土日はほ

とんどいなかった。

C：すれ違いだ。

Y：二人で一緒に過ごせる時間がかなり長いと思っていたにもかかわらず、現実はずうならなかった。

A：簡単に言うそうすね。

Y：でも、それだけで離婚はしないよね。

C：思い描いていたのと違ったということですか？

A：彼も、思い描いたのと違うと言っていた。私も「何か違う」みたいな。ぱら色とは最初から思っていなかったけれど、彼の仕事のやり方とか、周りの人間関係とかがすごく嫌だった。夜中に酔っ払って誰かを連れてくるとかではないけれど、私とのプライベートよりも優先になっていった。

Y：つまり、Aさんとのプライベートが一番ではない、と感じたということだね。

C：「私は何？」みたいな感じね。分かる。向こうのご両親とかの家族は？

A：「あなたも仕事を持っていたほうがいいよ。私は付いていくしかなかったから」って、お義母さんから言われた。お義母さんも多分孤独だったと思う。

Y：最初の一年って、すごく大事だった。最初の一年間で、知らなかった部分が必要に実感に見えてくる。そこを二人でどう乗り切っていくかによって、その後が決まるんだよ。でも本当にこの



Aさん:1970年生まれ。年齢は39歳。生まれた場所は岐阜。育った場所は東京。短大英文科卒業後、保険会社に5年勤務後、結婚退職。その後主婦をしながらパートを経験し、約5年で離婚。現在は、都内の有名ホテルに勤務。ウェディングプランナーが現在の業務。結婚歴は1回、子どもはいない。

(イラスト作成:協会員 前村浩一)



Bさん:1970年生まれ。年齢は39歳。生まれも育ちも埼玉。4年制大学卒業後、運輸会社に正社員で約9年間勤務。その後派遣の仕事に就き、現在4社目。公益法人に勤務。結婚歴はなく、子どももいない。

くらいのことで離婚しちゃう？

A…私は、向こうから離婚してくれと言われました。まさにこのくらいのことで。離婚はしたくなかった。でも、今は離婚してよかったと思います。というのも情としてはすごく好きだったけれど、男としてはそこまで好きじゃなかったかもしれないという思いもあって。離婚するときから、もうそんな気持ちで。結婚してから、彼のことを男としてあまり見ていなかったかもしれない。安定している人だけど、男としてすごく魅力的な人ではなかったような気がする(笑)。

C…それがいいって言うカップルもある。だから、人それぞれだね。

A…だから、すごく、そういうギャップがいまだにある。離婚するために結婚したような感じかなと、ふと思った。

C…深いわね。付き合っていたら、そのままダラダラしていたかもしれないし？

A…そう。そういうきっかけもなかった

ら、そのまま文句も言わずに今まで来ていたかもしれない。

Y…Bさんは、「結婚したいです」とは言っていたよね。なぜ結婚したいの？

B…やはりパートナーが欲しいです。

Y…パートナーって何？ 自分の頭の中にあるパートナーってどういう人？

B…やはり一緒に生活して、一緒にずっと長い先まで人生を歩んでいく人。結局独りだったら、あとはもう親だけがいって、親が亡くなって自分だけが残って、自分が亡くなって終わる。結婚したら、子どもができて、また違った人生を歩める可能性があるわけです。妹が先に結婚して子どもがいるんですけど、それを間近で見ている。独り残されて同じ人生がずっと続くのかと思うと、やはり「いいな」と思って。みんな独りだったら、「遊びに行こう」って言えば、海外旅行に行ったりできるけれど、みんな「家庭があるから」と断られてしまったら、遊べる幅も狭い。

Y…さっきAさんが言っていたように、

周りの状況をみて、自分が少数派になつてきているところも、やはり理由としてある？

B…あります。やはり、パートナーとは常に一緒に行動していくわけですよ。

C…誰かいたほうがいいと、私も思う。ゆるぎないというか、友達は友達、パートナーは、家に帰っても一緒にいられる。しかもリラックスできて。

B…いろんな行動が共にできる。

C…別にいつも一緒にじゃなくていいけれども、何かのときには、「振り返ったら奴がいる」ですよ。何かあったときに、「あー、いてくれてよかったな」という安心材料。本当に今いたら、「いてくれてよかったな」とか、多分思う。安心するというか、何かあったときに、やはり一番に相談できるといえるか。何かの時の安心感、そして、やすらぎなんです。

Y…Bさんの場合、結婚したい気持ち強いのに実現していない。なぜ？ 見合いで結婚するということもあり得るのに。

B…見合いもしましたが、ある期間付き合いお互いどちらかが「結婚しよう」と持ち出さなければ、そこまではいかない。付き合ったけれど、お互いにその話は出ず、どちらを取るかと言ったら、「やはり別れよう」という話になっちゃった。



Cさん:1971年生まれ。年齢は38歳。生まれた場所は千葉県。父の仕事の関係で兵庫県、富山県、宮城県で育ち、現在は千葉県在住。2年制の専門学校を卒業後、銀行に約7年勤務後、結婚退職。結婚後は専業主婦。その後パートを経験。現在は派遣で、銀行に4年ほど勤務中。結婚歴は1回、子どもはいない。

(イラスト作成:協会職員 前村浩一)

C: 見合いでもまず付き合わないですよ。会ってみて嫌だったら。それで間違えて結婚しちゃったら、もっと大変だし。B: だから、もうその時点ですぐパッと別れる。だから、別れるのはすごく早い。Y: そうすると、付き合い始めたというよりも、むしろ数回会っているうちに、「自分には合わない」、あるいは向こうが、「おれには合わない」という感じで、そこまでは至らない。これからどうしたいの？

A: その質問が一番……。

C: そうだよ、私が聞きたいです。

B: そうですよ。どうしたらいいかわからない。

A: 「どうするの、これから」とか、親にすぐ聞かれるんですけど、どうしようもない。

C: 「あんたはこのまま独りで、ここにいるの？」なんて。

A: うちの妹いわく、「目の前にある仕事を一生懸命やって生きていくしかない」と。

Y: バツ一のお二人ももうこりこりって感じが、別にないんでしょう？

A: 私は、今の自分でまた結婚したい。自分自身いい意味で変化してきているし、今の仕事(ウェディングプランナー)も含めて、多少はいろいろな経験もしているから。ただ、次の結婚生活がうまくいくかといったら、そんなに自信はない。

C: 自信のある人なんていないよ。

A: また失敗するんじゃないかという、そういう自分もいる。だから、どんな慎重になってきている。

Y: お二人ともそういう意味では、誰かいればぜひ、というのがあるわけだね。

A、C: あります。

Y: ところで、Bさんに質問。「理想の相手と結婚したいんです」と、よく言うけど、理想の人って何？ 自分のフーリングで、「この人は理想の人だな」と思った人が理想の人？

B: 好きになった人が理想の人。

Y: それだけなら、絶対的に間違い。好きになった人、好きって、恋っていう意味？ ずっと恋心を抱き続けることあり得ないよね。

B: 恋心を抱き続けるのは無理です。ただ情が沸くとか、そういうふうに「好き」の形は変わっていく。基本的に「好き」がないと、やはりだめだと思います。

C: 好きというか愛情は、「愛」と「情」で、最初は愛一〇〇%だったかもしれない。そのうち愛二〇%、情八〇%、それでも二つ合わせれば一〇〇%愛情で、そういうもの。歳とっても、愛〇%、情一〇〇%はないかもしれないけど、足して一〇〇%なら。

Y: 愛と情を足したものが、同じレベルでずっと行けばいいわけだ。いいこと言うね。でも、その人はずっと理想の人であり続けると考える？ 例えば、結婚の時点においてベストな人でも理想の人でも、その先においてずっとそうであり続けるということは、必ずしも言えないということ。

B: でも、それを言ったら先のことは分からない。やはり結婚するときに「この人だ」と思ったら、もうそれで行くしかない。「嫌になるかも」と、先のことを思ったら結婚はしないと思います。踏み出してみないと分からないから。

A: 私は、今度は思つかも。

C: 「この人はずっと一緒にいられそうな人だ」と考える人がベストな人。多分私にとっては、今は一番じゃなくても、長い目で見てベストな人ということかな。

B: 私も一度好きになったら、そんなに嫌いにならない。「顔も見たくない」とか、そういうことにはならない。だ

から、周りの「すごく嫌になる」というのは、自分では分らない。

C…私は、今でも別れただんなさんと会っています。私は全然嫌いじゃない。

A…私は彼とは離婚後一度も会ったことがないです。

Y…離婚してから、子どもや親や親戚とかの関係なく、何回も会って、すごく珍しくないですか。なぜ、前のだんなと再婚しないの？

B…前のだんなさんって、今独身なんですか？

A…まだ結婚していないよね。Cさんのことを今でも好きだといいいね。でも、Cさんはそこまでの自信がないの？

C…もし、元だんなさんと再婚するなら、本当にやり直すと思ってしないと相手に失礼だと思う。親とか家族もいるから、自分たちだけのことじゃないし。

親たちは、私たちが会っていることは多分知らないで、そんな中途半端には言えない。でも、離婚している人は、今の会社でも実は結構いっぱいいます。

Y…統計を見ると本当に多い。ざっくりいうと、結婚した人たちの三組に一組が法的に別れている。そうすると、うまくいっているのは三組に一組もないかな。離婚していないけども、うまくいっていないというのも当然いる。Cさんは、子どもがいたら、結果は違っていた？

C…違っていたかもしれない。子どもがいたら、子どものことも考えるから。

私の場合、子どもがいなくても、両親とか相手の家族もあるので、申し訳ないという気持ちで当時はいっぱいだった。子どもがいたら、さらに考える。

「子どもだけでつながっている」みたいな夫婦にはなりたくないの、そこで頑張る。何か改善しようと思う。寂しいですもの。子どもがいて、「この子がいるから別れないわよ」みたいなものは、私は嫌。子どもに対しても失礼です。でも別居をずっとして、やはり子どもが一番のネックみたいで、

実質夫婦ではなく、ほぼ別れているような人でも、子どもがいるから別れていない人も多い。

B…でも、私はここまで聞いても一度は結婚したいというのがあった。結婚してみなければ分からない。逆に「どんなだろう」というのはあります。友達とよく話をしている、「結婚していないから分からないよ」とか言われてしまつと、同じ土俵に上がれない。そうすると、だんだん結婚している人とは疎遠になってくる。

Y…同性の友達が結婚したら、友達関係は続かない？

B…私は、友達は友達でずっと思っていた。でも実際に、自分は結婚しないで友達が結婚すると、やはり生活

パターンは違うし、話すことも違う。それに女性って、共感しないと話をしても楽しくない。「そうだね、そうだね」って言ってもらわないと、自分も楽しくないし、そうするとやはり疎遠になっちゃう。男の人はどっちかというと、互いを認め合い、意見を言うのがあるけど、女性の場合は違う。

Y…Bさんが言うように、女性は感情の共有を求め合う。それは異性に対しても、同性に対しても。男は問題解決を図ろうとする。よくいわれることだね。例えば、みなさんが専業主婦だったとする。「今日こんなことがあってね、あんなことがあってね」と、困ったような感じでだんなに言う。女性はそれを聞いてもらえれば、それでかなり満足する。だけど男は、問題を提起されれば何か解決策を与えないといけないという頭がある。「土日の落ち着いたときにでも話してくれればいいのに、仕事で疲れて帰っているときに、何で今こんな話をするんだろう」というのがあるから、「ふん、ふん」という生返事になる。私なんかも、実際に家ではそうだよ。

C…普段報告する人がいなかったら、奥さんは特にそうなるでしょうね。

Y…それから、相手は自分とは違う、相手は自分の思い通りには行動してくれないという認識は、結婚前からあった？



A…そう聞かれたら、どっちかといったら、私はなかったです。

Y…今はそう思う？

A…やはり人間って、パートナーじゃなくても、友達関係も、思いどおりにはならないということは、今まで年を経てきてそう思う。

Y…それは、配偶者も含めてあくまで他人という人間関係を前提としていないと難しいというのが分かり始めてきたということになる？

A…そうですね。結婚する前は、若いし、そんなことは考えていなかった。でも生活してみたら、やはり違った部分も出てくる。どんなに頑張っても理解し合えない部分が出てきちゃう。また、育った環境から、埋められないものって絶対にある。この仕事（ウェディングプランナー）をしていて、家同士を見てみると、本当に「この家庭とあの家庭の子ども同士が、よく結婚するな」と。結婚前から明らかに合っていない。嫁から、結婚式の前日に新郎のお母さんに対する愚痴とかを聞かされている。

C…大変だ。「これからが思いやられるよ」みたいなものだね。

Y…それは割増料金を取らないといけないうらいだね。愚痴聞き料。（笑）

A…だから、結婚式なのに親同士が目も合わさない。

C…育った環境の違いは仕方がないよね。

本当に相性で合わないというのもあるのかもしれない。

B…理解できないというのもあるかもしれない。

C…例えば、前だったら通じたものが通じなくなる。こっちの伝え方も、もしかしたら向こうの求めている伝え方と違うのかもしれない。だから、こっちがいい状態だったら伝え方を変えて、彼が分かるような伝え方ができるのかもしれない。向こうばかりが悪いわけでもなく、こっちも悪いのかもしれないと思う気持ちがないと、そういうときは伝わらない。「もうちょっと違うふうにして頑張ろう」と思えるときは、まだ頑張れるときだと思います。

Y…おれの結婚式の時、来賓が言っていた名言を思い出した。「結婚する前は互いを両目でしっかりと見てきた。今日からは、片目をつぶりながら相手を見るように」って。つまり、結婚する前は、お互いの共通点を探そうとするんだって。要するに、自分たちが合うところを探ろうとするんだ。そして、結婚したら共通点は広がっているけれど、逆に合わないところ、違うところに目が行きがちになるんだって。合わない部分のささいな積み重ねがいちばんまずいってこと。

B…結婚したら、合うのが当たり前だと思っているから、違うというのが目に

付くんだ。

C…ちりも積もれば山ですね。あります。私は結婚してすぐの一ヶ月ぐらいが一番つらかった。新婚が一番嫌だったかもしれない。専業主婦をしたことがなかったたので、新しい生活パターンに慣れていなかった。すごくイライラしていたと思う。でも今、本当に離婚が多いですね。自分がまさか離婚するとは思っていなかったですけど。

A…No no no 離婚したくはなかったけれど、離婚してよかったかなと思う。

C…私も、後悔はないです。そのまま一緒に暮らしても仕方ないし。離婚してしまった後は、前に進むしかないよね。

A…やはり日々の生活があるから。必死に生きていかなければいけないから。前に進むしかない、後ろに戻れない。

C…いつまでもそこにいるわけにもいかない。止まっていられないから。

A…母は私の結婚を全然あきらめていない。「バツイチでも全然大丈夫よ」って。

C…いいわ、前向きだわ。

Y…是非Aさんのお母さんの前向きさも見習って、皆さんが良きパートナーを見つけられるようにお祈りし、今日の座談会を終えたいと思います。ありがとうございました。